

決定不全性原理に基づく懐疑論について
—プリッチャードとゴールドマンの論争をてがかりに—

横山 幹子*

On the Underdetermination-based Skeptical Argument : referring to the debate
between Pritchard and Goldman

Mikiko YOKOYAMA

抄録

現代の分析哲学での懐疑論のもっとも顕著な形式化は、〈水槽の中の脳型懐疑論〉である。それは、認識的閉包原理に基づくので、閉包原理に基づく懐疑論とも呼ばれ、そのような懐疑論への主な反懐疑論的反応は、外在主義的反応(たとえば閉包原理の拒否)である。ダンカン・プリッチャードは、『認識的運』で、閉包原理に基づく懐疑論は論点を捉え損なっており、懐疑論のもっとも根本的な問題を捉えることができるのは、決定不全性原理に基づく懐疑論だと指摘する。そして、外在主義的反応は、決定不全性原理に基づく懐疑論への満足はいく反応ではないとし、それに対する満足のいく認識的反応はないと主張する。そのプリッチャードの考えに、アラン・H・ゴールドマンは反論する。この論文では、その論争を考察する。そのため、まず、パトナムの「水槽の中の脳」の想定と、いわゆる〈水槽の中の脳型懐疑論〉を、それぞれ整理する。次に、プリッチャードとゴールドマンの考えを概観する。その後で、ゴールドマンの批判がプリッチャードの考えに対するものとしては不適切である一方で、プリッチャードの考えにも問題があると論じる。そして最後に、懐疑論に反論する際に何が重要かを素描する。

Abstract

The most prominent formulation of the skepticism in contemporary analytic philosophy is “Brains in a vat skepticism”. It is also called the closure-based skeptical argument because it is based on the epistemic closure principle. The main anti-skeptical responses to the closure-based skeptical argument are the externalist responses, such as the rejection of closure principle. Duncan Pritchard points out in “Epistemic Luck” that the closure-based skeptical argument misses the point of skepticism and only the underdetermination-based skeptical argument can capture the most fundamental issues in skepticism. He claims that the externalist responses are not satisfying responses to the underdetermination-based skeptical argument and there is no satisfactory epistemic response to the underdetermination-based skeptical argument. Alan H. Goldman makes an objection against Pritchard. This article examines the dispute. First, I will organize Putnam’s “Brains in a vat” supposition and the so-called “Brains in a vat skepticism”. Next, I will review both Pritchard’s idea and Goldman’s idea. Then, I will argue that while Goldman’s objection against Pritchard is inadequate, there is also a problem in Pritchard’s idea. Finally, I will outline what is important when arguing against skepticism.

* 筑波大学図書館情報メディア研究科
Graduate School of Library, Information and Media Studies University of Tsukuba

1. はじめに

〈自分が正しいと信じていること(知識¹)は、本当は正しくない(知識ではない)のではないか〉という疑念は、任意のある一つの命題についてのものであるなら、ごく一般的なものである。われわれは、何らかのことに関して、その真であることを疑って、本当の真理を求めたりする。たとえば、〈彼は、昨日、自宅にいた〉という命題を信じていたが、その後で、それが正しくないのではないかと考えることは、ごく普通のことである。けれども、その疑念を、〈誰に関しても、その人が正しいと信じていることは、すべて、本当は正しくない〉、〈われわれは、何も知ることができない〉のように広げ、そうであることを相手に説得させる議論を形成するとしたら、それは、哲学における懐疑論の問題になる。そして、われわれが知識を得ることができるということは、知識についてさまざまな視点から考える際の前提ともなるので、哲学における懐疑論の問題は、知識について考える際に、非常に重要な問題となる。

現代分析哲学の視点から懐疑論の問題を扱う際に、避けてとおることのできないのは、ヒラリー・パトナム²の「水槽の中の脳」という想定³である。そして、たとえば、その想定が懐疑論を主張するために出されたものではないとしても、その影響力は変わらない。

そのパトナムの「水槽の中の脳」という想定から、いわゆる〈水槽の中の脳型懐疑論〉、もしくは、閉包原理に基づく懐疑論が生じる。そして、現代の分析哲学の視点からの、懐疑論に関する議論で、主に問題になっているのは、閉包原理に基づく〈水槽の中の脳型懐疑論〉なのである。

その閉包原理に基づく〈水槽の中の脳型懐疑論〉について詳しく検討しているのが、ダンカン・プリッチャード⁴の著『認識的運』⁵である。彼は、その中で、そのタイプの懐疑論がどのようなものかを整理し、そのような懐疑論に対しては、ある外在主義⁶的な反論が役に立つと述べたうえで、そのタイプの懐疑論は、もっと基本的な懐疑論を前提しているものであり、それに対しては、どの外在主義的な反論も役に立たないと論じている。そして、彼がそのように論じる中で、大きな役割を演じている考えが、われわれが水槽の中の脳であるという仮説と、われわれが持つ物理的世界の存在についての信念を比べた場合、証拠に関してはどちらも同等であるという考えである。

そのようなプリッチャードの考えに対して、アラン・

H・ゴールドマン⁷は、その論文「水槽の中の脳の懐疑論のための決定不全性という議論」⁸の中で、反対する。彼は、われわれが水槽の中の脳であるという仮説と、われわれが持つ物理的世界についての信念を比べた場合、証拠に関してはどちらも同等であるという考えは、不適切であると論じているのである。

本論文では、上記のような議論をうけて、懐疑論の問題に答えるためには、どのような視点が重要かを考察する。その際、まず、パトナムの「水槽の中の脳」という想定がどのようなものであり、その想定から生じる〈水槽の中の脳型懐疑論〉がどのようなものかを整理する。次に、『認識的運』におけるプリッチャードの考えを概観する。それから、ゴールドマンによるプリッチャードへの反論がどのようなものかを確認する。その後で、ゴールドマンの批判が、プリッチャードの考え向けられたものとしては、不適切である一方で、プリッチャードの考えにも満足のいかない点があることを論じる。そして、最後に、懐疑論の問題に答えるためには、どのような視点が必要かを示唆する。

2. パトナムの「水槽の中の脳」という想定と〈水槽の中の脳型懐疑論〉

2.1 パトナムの「水槽の中の脳」という想定

パトナムは、その著『理性・真理・歴史』⁹の第一章で、有名な「水槽の中の脳」という想定を行っている。その想定とは、次のようなものである。

マッドサイエンティストが、ある人の身体から脳を取り出し、それを培養液の入った水槽に入れる。そして、その脳の神経の末端は、コンピュータに繋がれている。コンピュータからの電子工学的なインパルスを経験することにより、その人は、自分が今までと何ら変わらずに生活しているという幻想を持っている。たとえば、椅子に座って本を読んでいると信じているとき、実際は、椅子に座って本を読んでいるのではなく、椅子に座って本を読んでいると思わせるような電子工学的なインパルスが、脳に与えられているだけである。このようなSF的な想定は、次のような疑いを引き起こす。自分は、水槽の中の脳なのではないか。自分が存在すると思っているものは、幻想なのではないか。なぜなら、その人が経験している証拠は、すべて、水槽の中の脳である場合も、水槽の中の脳でない場合も同じであるからである。

パトナムは、上記の想定を變形し、次のような想定を考える。

すべての人が水槽の中の脳である。そして、外部に

マッドサイエンティストがいるのではなく、宇宙は、もともと、脳の入った水槽を管理する自動機構からできている。そして、それらの脳はすべて、自分達は同じ世界に生活しているという幻想を持っている。

パトナムは、上記のような想定によって、懐疑論を主張しようとしたのではない。けれども、彼の「水槽の中の脳」という想定から、現代の分析哲学における懐疑論の代表的な議論、いわゆる〈水槽の中の脳型懐疑論〉が生じている。それゆえ、次に、〈水槽の中の脳型懐疑論〉と呼ばれるものが、どのようなものかを確認しておきたい。

2.2 〈水槽の中の脳型懐疑論〉

いわゆる〈水槽の中の脳型懐疑論〉とは、どのようなものだろうか。それに関しては、戸田山和久『知識の哲学』の中で、非常にわかりやすく整理されているので、ここでは、それにしたがって、〈水槽の中の脳型懐疑論〉がどのようなものかをまとめたい。¹⁰

それは、後で見るように、閉包原理 (closure principle) に基づく懐疑論である。

命題 P を、日常的な命題、たとえば、〈あなたが座って本を読んでいる〉とする。そして、〈あなたが水槽の中の脳ではない〉という命題を Q とする。そこで、

- (1) あなたは P ということを知っている
- (2) あなたは「もし P ならば Q」ということを知っている

を仮定するなら、

- (3) あなたは Q であることを知っている

となる。しかし、パトナムの「水槽の中の脳」の想定では、誰も自分が水槽の中の脳ではないということを知ることができない。したがって、

- (4) あなたは Q ということを知らない

(3) と (4) は、矛盾するので、背理法により、少なくとも、(1) か (2) のいずれかは、間違っている。その際、(2) を維持するなら、(1) が、間違っている。

以上のように考えるならば、〈あなたが座って本を読んでいる〉という命題だけでなく、広い範囲の日常的な命題を知らないということになるのである。なぜなら、この場合、P は、〈あなたが座って本を読んでいる〉と

いう特定の命題である必要はなく、あなたが〈P ならば、自分は水槽の中の脳ではない〉を知っているような命題であれば何でもよいからである。

このような懐疑論は、いわゆる閉包原理を認めた場合に成り立つものである。なぜなら、(2) から (3) を導き出すためには、閉包原理、つまり、「A さんが P ということを知っており、さらに、「もし P ならば Q」ということも知っているならば、A さんは Q ということも知っている」¹¹が必要だからである。

以上のような議論で、〈あなたは何も知らない〉という結論を導き出すものが、いわゆる〈水槽の中の脳型懐疑論〉と呼ばれるものなのである。そして、ここでの〈あなた〉という二人称は、次章でプリッチャードに関して見るように、任意の人に対して広げることができる。そのようにして、〈水槽の中の脳型懐疑論〉の結論として、〈われわれは何も知らない〉が得られるのである。

3. プリッチャードの考え

前章で見た〈水槽の中の脳型懐疑論〉について詳しく論じたうえで、もっと基本的な懐疑論があることを示し、それについて論じているのが、プリッチャードの『認識的運』である。

プリッチャードは、『認識的運』の中で、分析哲学的な視点から、懐疑論について論じている。その際、まず、彼は、現在の哲学でもっとも顕著な懐疑論は、閉包原理に基づく懐疑論であるとし、その懐疑論に対する、いくつかの外在主義的な反論を検討している。そして、閉包原理に基づく懐疑論に対する外在主義的な反論の中で一番適切に思えるのが、新ムーアの反論であると述べる。そのうえで、閉包原理に基づく懐疑論は、知識に内在主義的にアクセスできないことが問題だという、懐疑論の論点を捉え損なっており、そのような内在主義的な正当化をめぐる、懐疑論のもっとも根本的な問題を捉えることができるのは、決定不全性原理に基づく懐疑論だと指摘する。そして、外在主義的な反論は、決定不全性原理に基づく懐疑論への満足のいく反応ではないとし、それに対する満足のいく認識的反応はないと主張するのである。

本論文では、プリッチャードの提出する決定不全性原理に基づく懐疑論についての検討が、中心となる。しかし、なぜその懐疑論が問題となるのかを理解するためには、彼の閉包原理に基づく懐疑論に関する見解を理解しておく必要があると思われる。それゆえ、まず、その見解を確認する。そして、その後で、決定不全性原理に基

づく懐疑論についての彼の考えを、概観する。

プリッチャードによれば、現在の哲学でもっとも顕著な懐疑論は、閉包原理に基づく懐疑論である。まず、彼による、知識についての閉包原理の説明と、閉包原理に基づく基本的な懐疑論のひな型の説明を、確認しておこう。

知識についての閉包原理

すべての行為者と ϕ , ψ について、行為者が ϕ を知っており、 ϕ が ψ を含むことを知っているなら、そのときは、その行為者は ψ を知っている。¹²

閉包原理に基づく根本的な懐疑論のひな型

(C1) もし、人が、広い範囲の日常的な命題について知識を持つことができるなら、そのときは、人は、関係する日常的な命題と両立不可能であると知っている、すべての根本的な懐疑的仮説の否定を知らなければならない。

(C2) 人は、根本的な懐疑的仮説の否定を知ることができない。

(C3) 人は、広い範囲の日常的な命題についての知識を持つことはできない。¹³

ここで、根本的な懐疑的仮説として、水槽の中の脳(BIV)という懐疑的仮説をとるならば、以下のようになる。

閉包原理に基づく根本的な懐疑論(BIV版)

(CB1) もし、人が、広い範囲の日常的な命題について知識を持つことができるなら、そのときは、人は、BIVという懐疑的仮説の否定を知らなければならない。

(CB2) 人は、BIVという懐疑的仮説の否定を知ることができない。

(CB3) 人は、広い範囲の日常的な命題についての知識を持つことはできない。¹⁴

上記のように、閉包原理に基づく懐疑論を説明したうえで、彼は、そのような懐疑論に対する、いくつかの外在主義的反論を検討するのである。

プリッチャードは、まず、そのような外在主義的反論の主なものとして、二つのものを挙げる。一つは、懐疑的仮説の否定を知ることができないが、閉包原理は拒否できるとして、閉包原理を拒否するものであり、もう一つは、懐疑的仮説と日常的な命題では文脈が違うと反論

するもの(懐疑論への文脈主義的反応)である。¹⁵そして、そのうえで、それら二つは、いずれも、「ある重大な点で、暗に内在主義者の認識論的直観に動機付けられた外在主義者の認識論」¹⁶であるとするのである。彼によれば、それらは、懐疑的仮説の否定を内在主義的な意味で知ることができないという主張を、動機として持っているのである。

それゆえ、プリッチャードは、閉包原理を維持し、文脈主義にもならないような、外在主義の第三の可能性に焦点を当てる。それが、新ムーア主義である。彼によれば、懐疑論への反論のために拒否されている閉包原理は、知識について内在主義的に考えることによって形式化されたものである。つまり、次のようなものである。

内在主義的な知識のための閉包原理

すべての行為者と ϕ , ψ について、行為者が、 ϕ という内在主義的な知識を持ち、 ϕ が ψ を含むという(内在主義的な)知識を持つならば、そのときは、その行為者は、 ψ という内在主義的な知識を持つ。¹⁷

そして、内在主義者にとっては、基本的な閉包原理と上記の閉包原理の間には違いはないが、外在主義者にとっては、基本的な閉包原理と、内在主義的な知識のための閉包原理は、異なるものとするのである。つまり、内在主義的な閉包原理が失敗しても、閉包原理自体は維持することができるのである。たとえば、日常的な命題に関して内在主義的に知り、懐疑的仮説の否定に関しては外在主義的に知ることでもある。外在主義者は、われわれが間違える可能性があったとしても、それは知識の所有と無関係であると考えることができるのである。つまり、先の(C2)を拒否するという手段をとることもできるのである。

新ムーア主義も、外在主義であり、信じがたい間違いの可能性と知識の所有は無関係であるとする。そして、その考えによれば、知識を持っているのは、信念が安全原理を満たしているときである。その際の、安全原理とは、次のようなものである。

安全原理

すべての行為者と ϕ について、行為者が、偶然的命題 ϕ を知っているなら、そのときは、非常に近くにある諸可能世界において、その行為者は ϕ が真であるときのみ、 ϕ を信じている。¹⁸

そして、プリッチャードによれば、新ムーア主義の立

場をとり、信念が安全原理を満たしているとき、知識を持っているとするならば、懐疑的仮説の否定についての知識を得ることができるのである。なぜなら、現実の世界に近い懐疑的世界があるなら、つまり、水槽の中の脳であるような可能世界が近くにあるなら、日常生活の命題を安全に信じていることができないだろうからである。そのように、水槽の中の脳であるような可能世界は、近くにはないので、非常に近くにある諸可能世界においては、日常的な命題と同様に、懐疑的仮説の否定も真なのである。¹⁹

プリッチャードは、以上のように、閉包原理に基づく懐疑論に対する反論としては、新ムーア主義的な反論が、最も良いものであると論じたうえで、しかし、懐疑論に対する外在主義的な、新ムーア主義的解決では、われわれは満足できないのだと主張する。そして、閉包原理に基づく懐疑論は、懐疑論の本当の源を偽装していると論じているのである。

なぜ、われわれは新ムーア主義的な解決では満足できないのだろうか。プリッチャードによれば、それは、われわれが、新ムーア主義者が言う意味とは違った形で、懐疑的仮説が偽であると知りたいからである。つまり、新ムーア主義による懐疑的仮説の否定という知識は、内在主義的な正当化に、決して伴わない一方で、われわれは、懐疑的仮説の否定を信じる根拠が欲しいと思っているからである。彼の言葉で言えば、新ムーア主義では、「反省的にアクセスできる適切な基礎 (adequate reflectively accessible grounding)」²⁰がないからである。そして、そのことは、彼によれば、新ムーア主義が、閉包原理に基づく懐疑論への不適切な議論であるということではなく、閉包原理に基づく懐疑論が、知識に内在主義的にアクセスできないという懐疑論の基礎にある問題を、適切に捕らえていないということを示しているのである。

では、外在主義的な懐疑論の否定では満たされないものを問題にしているのは、どのような懐疑論なのだろうか。プリッチャードによれば、それは、決定不全性原理 (the underdetermination principle) に基づく懐疑論である。²¹彼は、決定不全性原理を、以下のように、規定している。ここでは、Sは人を表す。

決定不全性原理

すべてのS、 ϕ 、 ψ について、 ϕ を信じるためにSが持つ証拠が、Sが ϕ と両立不可能だと知っている仮説 ψ より、 ϕ に賛成するということがないなら、そのときは、Sは、 ϕ を信じることに、内在主義的には、

正当化されない。²²

決定不全性原理に基づく懐疑論のひな型

(U1) 私の証拠が、両立不可能な懐疑的仮説であると知られている命題より、日常的な命題についての、われわれの信念に賛成するということがないなら、そのときは、私は、日常的な命題を信じることに、内在主義的には、正当化されない。

(U2) 私の証拠は、両立不可能な懐疑的仮説であると知られている命題より、日常的な命題についての、われわれの信念に賛成するということはない。

(U3) 私は、日常的な命題を信じることに、内在主義的には、正当化されない。(したがって、私は、日常的命題についての、内在主義的な知識を欠く。)²³

プリッチャードは、決定不全性原理は、内在主義的な閉包原理よりも弱いことを主張している。彼は、そのことを示すためにそれぞれの原理の例をとって論じる。²⁴ここでは、Sは行為者を、Eは、その行為者が、現在、椅子に座っているという日常的な命題を、SHは、対応する懐疑的仮説を表す。すると、閉包原理の例は、次のようになる。

(A) もし、Sが、Eを信じることに、正当化されるなら、そのときは、Sは、 $\neg SH$ を信じることに、正当化されている

また、決定不全性原理の例「もし、Sの証拠が、SHよりEに賛成することがないなら、そのときは、Sは、Eを信じることに、正当化されない」の対偶をとると、

(B) もし、Sが、Eを信じることに、正当化されるなら、そのときは、Sの証拠は、SHよりEに賛成する

となる。

まず、(A)の(B)に対する関係に関して試みる。その際、

(1) Sが、Eを信じることに、正当化されるとするなら、(A)により、

(2) Sは、 \neg SHを信じることに、正当化される
ここで、ある命題を信じることに、正当化される
ということが、その命題の否定を信じることに、
正当化を欠くということを、含むとするなら、

(3) Sは、SHを信じることに、正当化されな
いとなる。ここでの正当化という概念は、内在主義的な
ものである。 (1) と (3) から

(4) Sの証拠は、SHよりもEに賛成する
となる。したがって、次のことが帰結される。

(5) もし、Sが、Eを信じることに、正当化され
るなら、そのときは、Sの証拠は、SHよりもEに
賛成する

これは、(B)と同じである。そのように、正当化の
ための閉包原理は、決定不全性原理を含む。

次に、逆の方向を考えてみる。その際、(B)の変形
である

(B*) もし、Sが、SHを信じることに、正当
化されるなら、そのときは、Sの証拠は、Eよ
りSHに賛成する

を追加して考える。前と同様に、

(1) Sが、Eを信じることに、正当化される
とするなら、(B)から

(2) Sの証拠は、SHよりEに賛成する
となる。先と同様に、それは、

(3) Sの証拠は、EよりSHに賛成するとい
うことはな
い

となる。しかし、そこから、(B*)の対偶を使
って得られるのは、

(4) Sは、SHを信じることに、正当化され
ないである。これは、閉包原理より、弱いものである。な
ぜなら、SHを信じることに、正当化されないとい
う事実から、SHの否定を信じることに、正当化
されるということは、生じないからである。

上記のように、プリッチャードは、決定不全性原理
は、閉包原理と論理的に同値ではないと論じる。そし
て、彼によれば、だからこそ、閉包原理を否定する
だけでは、懐疑論的な論争にとって、十分ではないの
である。

では、このような決定不全性原理に基づく懐疑論に
関して、プリッチャードは、どのように考えているの
だろうか。先にも述べたように、彼によれば、この
ような懐疑論に対しては、外在主義的な反論は役に
立たない。な

ぜなら決定不全性原理に基づく懐疑論に反対する
ために求められているのは、われわれがその知識に
内在主義的にアクセスできるということであるから
である。新ムーア主義の場合も、日常的な命題の
内在主義的知識は、究極的には、懐疑的仮説の
否定の外在主義的知識に依存している。それは、
たとえば、〈われわれは水槽の中の脳である〉
という命題と〈われわれは水槽の中の脳ではない〉
という命題を比較した場合、〈われわれは水槽
の中の脳ではない〉という命題により賛成する証
拠があることを示してはいない。彼によれば、
決定不全性原理に基づく懐疑論に対して外在
主義的に答えようとすることは、的外れなので
ある。

以上のように、プリッチャードは、決定不全性
原理に基づく懐疑論は、閉包原理に基づく懐
疑論よりも基本的なものであり、そこでの問
題は、われわれが知識に内在主義的にアクセ
スできないということであると論じているので
ある。もちろん、外在主義的に、知識を持つ
ことと内在主義的な正当化を分けることも可
能である。しかし、たとえそうであっても、
内在主義的な正当化は認知的に望まれる。な
ぜなら、われわれは、自分の信念に対して認
識的責任を持っていることによって、知識を
適切に主張できると考えられるからである。

プリッチャードは、内在主義的な正当化が認
識的に望まれるということ、「反省的な認知的
運 (Reflective epistemic luck)」²⁵を排除
することが、認知的に望まれると表現する。
彼によれば、反省的な認知的運とは、「行為
者が反省によってのみ知ることができるもの
だけが、その行為者に与えられるなら、その
人の信念が真である」ということは、運の
問題である」²⁶ということである。そし
て、彼は、決定不全性原理に基づく懐疑論
は、反省的な認知的運を排除できないこと
を示していると言うのである。

そのように、懐疑論の問題は、内在主義
的知識に関するものであるが、反省的な認
識的運を完全に排除するような認知的反
応はないと論じた後で、プリッチャード
は、だからといって悲観的になる必要は
ないと主張する。彼によれば、懐疑論に
対するプラグマティックな反応があり、
それは、懐疑的仮説の否定を疑うこと
はばかげているということを示している
のである。そして、彼は、日常的な信
念は認知的には十分に根拠づけられる
(grounded) ことができない一方で、
プラグマティックに合法とされる
(legitimated) ものであると論じて
いる。²⁷

4. ゴールドマンの見解

ゴールドマンは、その論文「水槽の中の脳」の懐疑論のための決定不全性という議論の中で、われわれが水槽の中の脳であるという仮説と、われわれの物理的世界の存在についての信念とを比べた場合、証拠に関してはどちらも同等であるという考えに、反対している。つまり、懐疑的な信念と日常的な信念とを比べた場合、証拠に関してはどちらも同等であるという考えに、反対している。われわれが水槽の中の脳ではないというわれわれの信念を支持する証拠がないので、われわれはそのような知識を主張できないという考えは、不適切であると、彼は考えているのである。ここでは、彼の議論が、どのようなものであるかを見てみたい。

ゴールドマンは、われわれが水槽の中の脳であるという仮説より、物理的世界の存在についてのわれわれの信念に賛成するような証拠はないという考えが、適切ではないと示すために、次のような場合を想像して、その場合と、水槽の中の脳の仮説と物理的世界の存在についての信念の場合を、比較してみるように勧める。²⁸

ゴールドマンが想像するよう促すのは、ある殺人の裁判の状況である。彼によれば、そこでは、有罪とするためには、高い基準が満たされなければならないことに、すべての人が同意している。その裁判で、検察側は、5人の目撃者がいるということを、証拠として示す。そして、この5人には、その殺人が行われたことによって、利益も不利益も生じないということも示す。その目撃者たちは、執事が、彼の雇い主と、自分の給料と職務に関して激しく口論したあとで、その雇い主を、キッチンナイフで繰り返し刺したのを、すぐそばで見たと、証言している。そのうえ、検察側は、血の付いたナイフが、執事の所持品の中に見つかり、そのナイフには、執事の指紋がついていたということも、証拠として示す。それに対して、被告人側の弁護士は、これらすべての証拠は、次のような場合の証拠にもなりうるということを主張する。つまり、雇い主の妻が、執事にとてもよく似た人(だれも知らないけれども、執事は双子で、そっくりの兄弟がいる)を雇い、その人に執事のまねをさせ、雇い主を殺させ、執事の指紋の付いたキッチンナイフを探させ、そのナイフに、被害者である雇い主の血を塗らせ、それを執事の部屋に置かせて、執事に犯罪の濡れ衣をきせようとした場合にも、検察側が出している証拠がすべて当てはまると言うのである。そして、その弁護士は、雇い主の妻が犯人であるというこの可能性は、排除されるこ

とができないので、つまり、提出された証拠は、どちらの側の証拠にもなり、雇い主の妻が犯人だという後者の説明より、執事が犯人だという前者の説明に、より賛成するような証拠はないので、陪審員たちは、執事が有罪だという判決を下すことができないと主張するのである。

上記のような場合、ある種の認識論者を除くすべての人が、証拠に基づいて、その執事が有罪だと知ることができる同意するだろうと、ゴールドマンは言う。すべての証拠が雇い主の妻が犯人であるという説明と矛盾しないからといって、その説明は、陪審員たちにとって、魅力的なものではない。証拠は、明らかに、執事が有罪であるという信念のほうに賛成する。彼は、次のように言っている。「たとえば、その証拠が、明らかな説明と分かりにくい説明の両方と矛盾しないとしても、実際、その証拠は、分かりにくい説明より、明らかな説明により賛成する。」²⁹彼は、最良の説明への推論を使って、雇い主の妻が犯人であるという説明よりも、執事が有罪であるという説明の方が、より適切であることを述べるのである。

ここで、最良の説明への推論とは、どのようなものかを確認しておく必要がある。

認識論的正当化のために、われわれは、推論を使う。推論の主なもの、演繹的推論と帰納的推論であるが、そのほかにも、最良の説明への推論、もしくは、アブダクションと呼ばれるものがある。そして、それは、パースに帰せられる概念である。パースは、観察された事実を説明するために、仮説を形成することを、アブダクションと名付けたのである。³⁰

最良の説明への推論、アブダクションは、われわれの日常的説明においてもよく見られるものである。たとえば、友人が、あまり間食をしなくなった。ケーキバイキングに誘っても、以前は、喜んで一緒に行ったのに、最近、断られる。また、一緒に食事に行くと、以前は、揚げ物などのカロリーが高めのものを食べていたのに、最近、和風のリゾットなどのカロリーの低いものばかり選んで注文している。そのうえ、ウォーキングも始めた。その場合、われわれは、それらから、〈彼女がダイエットを始めたのだろう〉という仮説を形成する。このような推論は、ある現象をもっとうまく説明するのは、どのような仮説であるかを考えるものである。

戸田山和久『知識の哲学』によれば、「いくつかの命題からそれらの命題すべてをうまく説明してくれる命題を導き出す推論」³¹が、最良の説明への推論、アブダクションなのである。

このような最良の説明への推論を使うならば、先の思

考実験の場合、雇い主の妻が犯人であるという説明よりも、執事が有罪であるという説明の方が、より適切であるというのが、ゴールドマンの考えなのである。

ゴールドマンは、この殺人の裁判の場合に言えることは、水槽の中の脳の仮説と物理的世界についての信念の場合にも、言えると考える。つまり、最良の説明への推論を使うならば、われわれが水槽の中の脳ではないと知ることができない、言い換えるならば、その信念は正当化されないという考えに、われわれが同意する必要はないのである。

ゴールドマンによれば、彼の説に反論するためには、先の裁判の場合と、水槽の中の脳の仮説と物理的世界についての信念の場合が、異なると論じなければならない。そして、彼は、異なると論じる四つの場合を想定している。その四つの場合とは、次のようなものである。³²

- (1) 裁判の例の場合、双子や瓜二つの人がいるなら、弁護側は、その人を捜し出してきて証拠にすることができるはずである。それとは違って、われわれが水槽の中の脳であるなら、われわれは、われわれが水槽の中の脳であるという証拠を得ることができない。
- (2) 裁判の場合は、後者のシナリオが、滅多に、もしくは、決して成し遂げられないとする、独立した証拠がある。
- (3) 殺人の場合の証拠は、執事が殺人を犯したという仮説に賛成する一方で、われわれが日常の信念のために持つ証拠は、水槽の中の脳の仮説より、日常の信念に賛成するという事はない。殺人の場合は、一方の説明が他方より明らかによい一方で、グローバルな懐疑論的シナリオにおいては、一方が一方より優れているということはない。
- (4) より良い説明は、それらが原則的にさらなる観察によって検証されるとき、知識を生み出すことができる一方で、原則的な検証がない場合には、そうではない。

以上のような反論を想定したうえで、ゴールドマンは、どの反論も適切ではなく、裁判の場合と、水槽の中の脳の仮説と物理的世界についての信念の場合が、異なるとは言えないと論じるのである。次に、その詳細を見てみよう。

まず、(1) について見てみよう。ゴールドマンによれば、それは二つの点で不適切である。一つは、裁判の場合、妻が注意深く殺人計画を実行したなら、瓜二つの人が存在した証拠さえ消すことができるからである。もう

一つは、逆に、われわれが水槽の中の脳であるということの証拠が得られる可能性も考えられるからである。たとえば、プログラマの一人が、われわれが水槽の中の脳であるという情報が後でわかるように、プログラムしておくかもしれない。つまり、裁判の場合は、より確実な証拠が発見される可能性があるが、水槽の中の脳の場合そうはいかないというのは、不適切なのである。

次に、(2) について見てみよう。ゴールドマンによれば、それも不適切である。彼は、次のように、考える。裁判の場合、もし後者のシナリオが成し遂げられていたら、われわれは、成し遂げられたことを知らない。だから、成功しなかった証拠を持たない。証拠を持つのは、失敗したときだけである。

さらに、(3) についても、不適切だと、ゴールドマンは言う。彼によれば、確かに、殺人の場合、執事が犯人であるという説明の方が、妻が犯人であるという説明よりも単純で優れているということは、真だが、われわれの物理的世界についての信念と水槽の中の脳の仮説を比べたときに、どちらがよいとは言えないというのは、偽なのである。なぜなら、水槽の中の脳であるという仮説では、細かい因果的メカニズムは示されていないのであり、水槽の中の脳の仮説は、普通の説明より、複雑であるからである。そのうえ、彼は、次のようにも言っている。「しかし、前段落の議論は表面的かもしれない。執事の説明の方がよりよいと知り、それに応じてそのことを確信するために、陪審員が、それに従えば、執事の説明の方がよりよいとなる基準を説明できる必要がないのと同様に、われわれは、常識や科学的説明の方がよりよいということを知るために、それに従えば、われわれの常識や科学的説明の方が水槽の中の脳の仮説よりよいという基準を、説明できる必要はない。」³³水槽の中の脳の仮説を聞いた後でも、誰もそれを信じないのである。

最後の(4) については、簡単に退けられるとゴールドマンは言う。なぜなら、先に述べたように、証拠が発見される可能性は、どの場合にもありうるからである。

以上のように、ゴールドマンによれば、われわれが水槽の中の脳であるという仮説、つまり、懐疑的な信念と、われわれの物理的世界の存在についての信念、つまり、日常的な信念を、比べた場合、証拠に関しては、どちらも同等であるという考えは、不適切なのである。

5. 考察

第三章で見たように、ブリッチャードは、決定不全性原理に基づく懐疑論の方が、閉包原理を使った水槽の

中の脳型懐疑論より、懐疑論として、基本的なものであるとしたうえで、決定不全性原理に基づく懐疑論の主張の重要性は、われわれが、知識に内在主義的にアクセスできないと指摘する点にあると論じていた。彼によれば、知識を持つことと、内在主義的な正当化を分け、内在主義的に正当化できなくとも、外在主義的に知識を持つことができるとしても、内在主義的正当化は、その重要性を失うものではない。それは、認識的に望まれるのである。なぜなら、われわれが知識を適切に主張するためには、われわれは、自分の信念に対して、認識的責任を持っていなければならない、言い換えるならば、自分の信念を支持する根拠をきちんと自分で述べられなければならない(自分の信念を支持する根拠に反省的にアクセスできなければならない)と考えられるからである。つまり、彼は、懐疑論の源は、われわれが知識に関して内在主義的正当化を望んでいる一方で、「反省的な認識的運」を排除できないところにあると論じていたのである。

それに対して、第四章では、ゴールドマンが、われわれが水槽の中の脳であるという仮説(懐疑的信念)と、われわれの物理的世界の存在についての信念(日常的信念)とを比べた場合、証拠に関してはどちらも同等であるという考え、つまり、決定不全性原理に基づく懐疑論において重要な役割を演じている考えは、不適切だと論じていることを確認した。

ここでは、まず、ゴールドマンの主張が適切かどうか、もし不適切だとしたら、どの点で不適切なのかを述べる。それから、次に、プリッチャードの考えにも問題があることを論じる。そのうえで、しかし、両者の議論には、それぞれ重要な点が含まれているということを指摘する。そして、最後に、懐疑論の問題に答えるためには、どのような視点が必要であることを示唆する。

最初に、ゴールドマンの主張に関して、見てみたい。

ゴールドマンの言うように、最良の推論への説明を使うことによって、望まれている内在主義的正当化ができるならば、決定不全性原理に基づく懐疑論は否定される。けれども、問題は、そう簡単に解決できるものではない。なぜなら、彼の答えでは、プリッチャードの言う「内在主義的根拠」を求めている人たちは、納得しないと思われるからである。最良の推論への説明で言えることは、演繹で言えるようなものではない。つまり、真理保存性があるものではない。言い換えるならば、前提がすべて真だからといって、結論が必ず真とはならない。形成される仮説は、あくまでも、蓋然性を含むものである。もともとの、パースの概念の説明に関して、伊藤邦

武の『パースのプラグマティズム』の中で言われているように、「仮説形成は、多様な現象のうちに、一つの概念的な構造を読み取ることであり、しかもこの構造を必然的な存在としてでも、現実的な存在としてでもなく、可能的な存在として読み取る作業である」³⁴。そして、「観察事実Cを論理的に含意するような仮説Aは、ほとんど無数に存在するであろう」³⁵と考えられるのである。けれども、内在主義的根拠を求めている人たちは、もっと必然的なものを求めているのである。そのことは、プリッチャードが、「反省的な認識的運」を排除したいと言っているところに、よく現れている。内在主義的根拠を求めている人たちは、信念が真かどうかは、運の問題であるという考えを排除したいのである。

もちろん、ここで、最良の推論への説明に必然性がないとしても、それは、〈われわれ人間ならそういうふうに考えるものだ〉ということを示しているのだと言うことは、できるかもしれない。しかし、それも、「反省的な認識的運」を除去したいと思っている人たちを納得させる根拠ではない。そのうえ、ゴールドマンに反論する人たちは、水槽の中の脳と裁判の例が区別できないことを認めたとうえで、裁判の例の場合も、われわれの常識の方が間違っているのだと主張することもできる。以上のように、ゴールドマンのプリッチャード批判は、論点がずれているのである。

しかし、プリッチャードに関して、問題がないわけではない。確かに、閉包原理に基づく懐疑論より、より基本的なところに、決定不全性原理に基づく懐疑論があるとするとところは、たぶん、正しい。なぜなら、まず、第一に、第三章で述べた、彼の論理的含意の議論には、問題がないように見えるからである。そのうえ、彼が言うように、閉包原理の否定により〈水槽の中の脳型懐疑論〉を否定しようとする外在主義者や、文脈主義をとる外在主義者が、内在主義的な動機に囚われているということも、明らかであり、そのことは、外在主義的な立場をとっていても、われわれは、どこかで、内在主義的な根拠を求めるものであるということを、示しているように思われるからである。しかし、認識的責任を果たすためには、「反省的な認識的運」をすべて排除しなければならないとするのは、極端である。なぜなら、われわれが他人に対して求める認識的責任は、そのようなものとは思われないからである。たとえば、先の殺人の場合、検察側の説明を、われわれは、認識的責任が求める反省的なアクセスとして認めるだろう。つまり、認識的責任が求める反省的なアクセスと、内在主義的な完全な正当化を区別する必要がある。しかし、それは、彼にお

いては、はっきりとはなされていない。もちろん、先に述べたように、彼は、プラグマティックな視点から、懐疑論の問題を扱うべきだとし、懐疑的な仮説の否定を疑うことはばかっていると論じている。そして、日常的な信念に対するプラグマティックな合法化はあると述べている。けれども、認識的には答えられないとして、論点をプラグマティックな視点に移すだけでなく、プラグマティックな視点と、認識的責任が求める反省的なアクセスとの関係について、もっと詳しく論じ、プラグマティックな視点から、認識的な問題について何か言えることがないかを考えることが重要だと思われるのである。

つまり、プリッチャード、ゴールドマンそれぞれの問題点は、プリッチャードに関しては、認識的責任と完全な内在主義的正当化とをはっきり分ける必要があるのではないかということであり、ゴールドマンに関しては、彼の反論は、完全な内在主義的正当化を求める人に対しては、役に立たないということである。

しかし、両者の議論は、それぞれ、懐疑論に対する重要な視点を含んでいる。

先に述べたように、ゴールドマンの議論は、懐疑的な仮説と日常的な信念のどちらかを選ぶ、完全な内在主義的正当化を求める人たちには、確かに、説得力をもたない。しかし、懐疑論について考えるとき、外在主義だけでは物足りないからといって、すぐに、完全な内在主義的正当化を求める必要はない。ゴールドマンの見解の中で、示唆されているのは、認識的責任、もしくは、われわれが反省的なアクセスとして求めるものは、最良の推論への説明から、得られることができるというものである。ゴールドマンの見解の中で、その点は、注目に値する。

また、プリッチャードの主張するプラグマティックな解決も、注目に値する。先に述べたように、認識的責任が求める反省的なアクセスと、完全な内在主義的正当化を区別したうえでも、プリッチャードの主張するプラグマティックな解決は、重要な意味を持つと思われるのである。

私は、上記の考察から、懐疑論を論じる際にどうあるべきかの示唆が与えられると考える。

まず、第一に言えることは、懐疑論を論じる際の視点、態度として、重要なことは、プリッチャードの言うように、知識を持つことと、知識を持っていることを主張することを分けるだけでなく、認識的責任が求める反省的なアクセスと、内在主義的正当化を分けることであるということである。そして、完全な内在主義的正当化が

なされなくとも、認識的責任を果たせる場合があることを認めることである。

そのように区別したうえで、どのようにして、決定不全性原理に基づく懐疑論に対して反対することができるかを考えることが、知識の哲学にとって重要なことなのである。それは、プラグマティックな視点によってなされることができる。そして、その問題について明らかにすることによって、どのような場合に、知識を持っていると主張することができるかを考えることも、可能になる。

そして、そのための方法として、ゴールドマンが言うように、最良の推論への説明は、大きな役割を果たすと思われる。たとえば、フォーゲルは、彼の論文「デカルト的懐疑論と最良の説明への推論」³⁶で、なぜ十分な証拠がないのに、われわれは、外的世界についての懐疑論よりも、常識的な説明に賛成するのかについて、最良の説明への推論を使うことによって論じている。また、水本正晴は、その論文「マトリックス世界はリアルか? : チャルマーズによる懐疑論への形而上学的解答」³⁷の中で、「何がリアルであるかの判断は、我々の他の関連する事実をすべて考慮した最善の判断に基づいているべきである」³⁸と言い、実際には知らないということと、知らないということを分けたうえで、「日常的信念が真であることを確立する前に、直接日常的知識を擁護できるのである」³⁹と論じている。ここで、それぞれについて詳しく論じることはしないが、認識的責任が求める反省的なアクセスと、内在主義的正当化を分けるという視点を取り入れるならば、それらの議論を、プリッチャードの言う決定不全性原理に基づく懐疑論に反対する議論として、捉えることができるであろう。

いずれにせよ、内在主義的な直観、われわれは知っていることに対して、知っているということを説明できなければならないという説明責任に関して、どのようにしたらきちんと説明できるかを、考えていくこと一つ一つが、基本的な意味での懐疑論への反論の具体的な例になっていくと思われる。

6. おわりに

本論文では、懐疑論に関するプリッチャードとゴールドマンの考えをまとめたうえで、懐疑論の問題に答えるためには、どのような視点が重要かを考察した。そのために、まず、第二章では、パトナムの「水槽の中の脳」の想定がどのようなものであり、その想定から生じる、いわゆる〈水槽の中の脳懐疑論〉がどのようなものであ

るかを整理した。第三章では、『認識的運』におけるプリッチャードの考えを概観した。第四章では、ゴールドマンによるプリッチャードの考えに対する反論がどのようなものかを確認した。第五章では、ゴールドマンの批判は、プリッチャードの考えに向けられたものとしては、不適切である一方で、プリッチャードの考えにも問題があると論じたうえで、認識的責任が求める反省的アクセスと、内在主義的正当化を分け、完全な内在主義的正当化がなされなくとも、認識的責任を果たせる場合があることを認めることが、懐疑論の問題に答えるための重要な視点であると論じた。そして、そのような視点で論じるための方法として、ゴールドマンが言うように、最良の推論への説明は、大きな役割を果たすということを示唆した。

注

1. 哲学では、知識という言葉は、普通、正しい信念を表すために使われる。日常の日本語では、〈正しい知識〉、〈間違った知識〉という言葉遣いをするが、本論文では、議論のため、〈知識〉と言った場合、正しい信念を表すこととする。
2. 心の哲学、科学哲学、言語哲学を主な関心領域とするアメリカの哲学者。
3. パトナムによる「水槽の中の脳」という想定については、Putnam, H. Reason, Truth and History. Cambridge, Cambridge University Press, 1981. (Putnam, H. (野本和幸, 中川大, 三上勝生, 金子洋之訳) 理性・真理・歴史：内的実在論の展開. 東京, 法政大学出版局, 1994.) 参照。
4. エジンバラ大学の認識論の教授。
5. Pritchard, D. Epistemic Luck. Oxford, Clarendon Press, 2005.
6. 現在の認識論、知識論において、内在主義とは、「信念が正当化されているかどうかかわれわれの心の中の認知状態だけによって決まるという考え方」(戸田山和久. 知識の哲学. 東京, 産業図書, 2002, p. 48.) であり、外在主義とは、「ある人の信念が正当化されているかどうか、その人の心の中の認知状態以外の要因が関係していてもかまわないという考え方」(戸田山和久. 知識の哲学. p. 52.) である。
7. ウィリアム・アンド・メリー大学の哲学の教授。
8. Goldman, A. H. The Underdetermination Argument for Brain-in-the-vat Scepticism. Analysis. vol. 67, No. 1, 2007, p. 32-36. ゴールドマンがこの論文で焦点を当てているのは、いわゆる〈水槽の中の脳型懐疑論〉ではないので、論文名を、「水槽の中の脳の懐疑論のための決定不全性という議論」と翻訳している。
9. Putnam, H. Reason, Truth and History. Cambridge, Cambridge University Press, 1981. (Putnam, H. (野本和幸, 中川大, 三上勝生, 金子洋之訳) 理性・真理・歴史：内的実在論の展開. 東京, 法政大学出版局, 1994.)
10. 戸田山和久. 知識の哲学. p. 94-99. 参照。(1) から(4) に関しては、97ページから引用している。このように整理したのは、ノージックであると言われている。ノージックの見解に関しては、Nozick, R. Philosophical Explanations. Cambridge, Massachusetts, The Belknap Press of Harvard University Press, 1981. (懐疑論に関する部分の翻訳は、Nozick, R. (坂本百大ほか) 考えることをかんがえる上巻. 東京, 青土社, 1997.) 参照。また、『知識の哲学』では、“Brains in a vat” は、「培養槽の中の脳」と訳されているが、私自身今まで「水槽の中の脳」と訳してきたので、ここでも、「水槽の中の脳」と訳している。
11. 戸田山和久. 知識の哲学. p. 98.
12. Pritchard, D. Epistemic Luck. p. 27. ここでの ϕ や ψ は命題を表している。また、斜体字は、原著。それらに関しては、以下の引用でも、同様である。
13. Ibid. p. 27-28.
14. Ibid. p. 28.
15. 外在主義的にどのようにして閉包原理を拒否するか、文脈主義がどのように機能するかに関しても、重要な問題であるが、ここでは、議論の焦点を絞るため、それに関する細かい議論は扱わない。しかし、それは、別のところで、論じられるべきものである。
16. Pritchard, D. Epistemic Luck. p. 34.
17. Ibid. p. 68.
18. Ibid. p. 71.
19. プリッチャードは、このやり方は、〈日常的な命題を知っているのだから、懐疑的仮説の否定を知っていなければならない〉というムーアの考え方と似ているが、ムーアの考え方とは違って、日常的な命題についての知識を、懐疑的仮説の否定を知っているという結論を得るために使っているのではないので、新ムーア主義と呼ばれると論じている。ムーアに関しては、Moore, G. E. Proof of an External

- World. Proceedings of the British Academy. Vol. 25, 1939, p. 273-300. 参照。
20. Pritchard, D. Epistemic Luck. p. 104.
21. プリッチャードは、その考えを、ブルックナーから得ているとしている。ただし、彼の議論との違い等に関しては、本論文の趣旨とずれるので、ここでは論じられない。ブルックナーに関しては、Brueckner, A. The Structure of the Skeptical Argument. Philosophy and Phenomenological Research. Vol. 54. p. 827-835. 参照。
22. Pritchard, D. Epistemic Luck. p. 108.
23. Ibid. p. 108.
24. Ibid. p. 109-111. 参照。(A), 決定不全性原理の例, (B), (A) と (B) の関係に関する論証の部分である (1) から (5), (B*) とそれに関する論証の部分である (1) から (4) は、『認識的運』から、そのまま引用している。
25. Ibid. p. 175.
26. Ibid. p. 175.
27. 「プラグマティズム」は、19世紀後半から20世紀、アメリカを中心に発展した思想で、「現実の生における具体的な行為の中で精神活動が果たす役割を見る視点に重心をおいて、そこから科学論・道徳観・存在論を改変し直そうという思想である」。(廣松渉他編. 岩波哲学・思想大辞典. 東京, 岩波書店, 1998, p. 1395.) プラグマティックという言葉は、その影響を受けて使われている。プリッチャードが、プラグマティックな反応によって、どのようにして、懐疑論をばかげたものだと論じているかについては、本論文では扱わないが、重要な問題であり、別のところで、論じられるべきである。
28. 以下の思考実験に関しては、Goldman, A. H. The Underdetermination Argument for Brain-in the-vat Scepticism. p. 32-33. 参照。
29. Ibid. p. 33.
30. Peirce, C. S. "Instinct and Abduction". Collected Papers of Charles Sanders Peirce: Volume 5 : Pragmatism and Pragmaticism. Hartshorne, C. ; Weiss, P. , ed. Bristol, Thoemmes Press, 1998, p. 105-107. Peirce, C. S. "Abduction, Induction and Deduction". Collected Papers of Charles Sanders Peirce: Volume 7 : Science and Philosophy. Burks A. W. ed. Cambridge, Massachusetts, The Belknap Press of Harvard University Press. 1966, p. 121-125. および、伊藤邦武. パースのプラグマティズム. 東京, 勁草書房, 1985. 参照。
31. 戸田山和久. 知識の哲学. p. 26-27.
32. 以下の整理は、Goldman, A. H. The Underdetermination Argument for Brain-in-the-vat Scepticism. p. 33. に基づいている。
33. Ibid. p. 34-35.
34. 伊藤邦武. パースのプラグマティズム. p. 191-192.
35. Ibid. p. 193.
36. Vogel. J. Cartesian Skepticism and Inference to the Best Explanation. The Journal of Philosophy. Vol.87, p. 658-666. なお、ゴールドマン自身も、Goldman, A. H. Empirical Knowledge. Berkeley, University of California Press, 1998. で、最良の説明への推論について、詳しく述べている。
37. 水本正晴, マトリックス世界はリアルか? : チャルマーズによる懐疑論への形而上学的解答. 現代思想 Vol.32, No. 1, 2004, p. 154-168.
38. Ibid. p. 163.
39. Ibid. p. 165.

参考文献

- Brueckner, A. The Structure of the Skeptical Argument. Philosophy and Phenomenological Research. Vol. 54. No. 4. p. 827-835.
- Goldman, A. H. Empirical Knowledge. Berkeley, University of California Press, 1998.
- Goldman, A. H. The Underdetermination Argument for Brain-in-the-vat Scepticism. Analysis. vol. 67, No. 1, 2007, p. 32-36.
- 廣松渉他編. 岩波哲学・思想大辞典. 東京, 岩波書店, 1998.
- 伊藤邦武. パースのプラグマティズム. 東京, 勁草書房, 1985.
- 水本正晴, マトリックス世界はリアルか? : チャルマーズによる懐疑論への形而上学的解答. 現代思想 Vol.32, No. 1, 2004, p. 154-168.
- Moore, G. E. Proof of an External World. Proceedings of the British Academy. Vol. 25, 1939, p. 273-300.
- Nozick, R. Philosophical Explanations. Cambridge, Massachusetts, The Belknap Press of Harvard University Press, 1981. (Nozick, R. (坂本百大ほか) 考えることをかんがえる, 上, 下. 東京, 青土社, 1997.)
- Peirce, C. S. Collected Papers of Charles Sanders Peirce: Volume 5 : Pragmatism and Pragmaticism.

- Hartshorne, C. ; Weiss, P. , ed. Bristol, Thoemmes Press, 1998.
- Peirce, C. S. “Abduction, Induction and Deduction”.
Collected Papers of Charles Sanders Peirce: Volume
7 : Science and Philosophy. Burks A. W. ed. Cam-
bridge, Massachusetts, The Belknap Press of Harvard
University Press. 1966.
- Pritchard, D. Epistemic Luck. Oxford, Clarendon Press,
2005.
- Putnam, H. Reason, Truth and History. Cambridge, Cam-
bridge University Press, 1981. (Putnam, H. (野本
和幸, 中川大, 三上勝生, 金子洋之訳) 理性・真理・
歴史：内的実在論の展開. 東京, 法政大学出版局,
1994.)
- 戸田山和久. 知識の哲学. 東京, 産業図書, 2002.
- Vogel, J. Cartesian Skepticism and Inference to the Best
Explanation. The Journal of Philosophy. Vol.87, p. 658-
666.
- (平成 19 年 9 月 27 日受付)
(平成 19 年 12 月 20 日採録)